

# 公主嶺調査記

甲賀 真広

## はじめに

本稿は、2018年8月22日に「満洲の記憶」研究会（以下、記憶研）の有志によって実施された、中国吉林省公主嶺調査の記録である。本調査では、金窪敏知氏を中心にして作られた公主嶺小学校同窓会の公主嶺市街図を手掛かりにして、「満洲国」（以下、括弧省略）期に建てられた要地の建築物見学を実施した。具体的には日本人が住んでいた住居、公主嶺駅、公主嶺小学校、農事試験場、嶺光学校などである。調査者は記憶研の大野絢也、菅野智博、甲賀真広、佐藤量の4名である。本稿では、公主嶺の調査に至った経緯、そして公主嶺の変遷を振り返り、現在の状況を述べていく。

## 1. 本調査の経緯

本調査のきっかけとなったのは、公主嶺小学校の卒業生である土屋（旧姓池田）洸子さんと細谷（旧姓吉富）和子さんの聞き取り調査である。聞き取り調査では、満洲国へ渡るまでの過程やそこでどのような生活を送り、どのように引揚げに至ったかなどをうかがっている。その語り

の中で、他の地域出身者の聞き取りからは、なじみのない言葉がたびたび出てきた。それは「ロス建て」という言葉である。これは彼らが当時住んでいた住居で、ロシアによって作られた建物のことである。公主嶺出身者が頻用するこの「ロス建て」は、現在どのようになっているのか興味が湧いた。

そこで本調査は、「ロス建て」を中心に、聞き取り調査で言及があった場所をめぐることにした。本調査で訪れたのは以下の通りである。記憶をたどる目的から、彼らが用いる呼び名ですべてを記す（本『満洲の記憶』5号「公主嶺小学校関連写真目録」74-101頁参照）。

## 2. 戦前期の公主嶺

清朝末期、ロシアは東清鉄道の敷設に伴い、この地を軍事上の要地としてとらえており、道路、兵営、教会、劇場、駅など次々に建設した。これらは現在の公主嶺の原型となった。しかし、ロシアによって進められていた都市計画が、1905年の日露講和条約によって日本を中心とした町作りがなされるようになり、ロシア

時代の建物に日本人が住むようになった。1907年から日本人の居住が始まると、10年後の1917年にはおよそ2000人（全人口の約35%）、1937年にはさらに増え、約4700人（約34%）となっている<sup>(1)</sup>。

公主嶺全体の人口も1942年には3万人を超え、「街」という単位から公主嶺「市」となった。

戦前には、満鉄の社宅や満鉄倶楽部の図書館、農事試験場、郵便局、幼稚園、警察官舎、日本人街の住宅など数多くの建物が、「ロス建て」であった<sup>(2)</sup>。インタビュー時、土屋さんはこの「ロス建て」について語り、また、公主嶺小学校同窓会が発行する記念誌でも「ロス建て」に関する記述が散見される。



「ロス建て」の住宅（旧池田宅）

撮影日：2018年8月22日

撮影者：大野絢也

29回生の矢野智子さんは「父の待つ公主嶺に着いたのは昭和九年十二月も末のことだった。厳冬の公主嶺。古いロス建ての陸軍官舎だった。近くには今まで見

たことのないロシア墓地、射撃場などがあった。満洲での冬、それは聞きしにまさるものだったが、火鉢とこたつだけの東京の冬と異なり、部屋にはペチカがあり、暖かく快適だった。」という<sup>(3)</sup>。

教職員であった田中真省さんは「公主嶺小学校は駅の正面にあって、くろずんだ赤煉瓦を大きな青柳（どろやなぎ）の枝間にのぞかせ、<sup>にれ</sup>楡のまばらな生垣に囲まれていた。古色蒼然として、新設校の現代様式からは、およそ縁遠い非学校的なものであった。それもそのはず、ロシアが満洲占拠中、教会として建てたものとのこと、したがって校内にはその面影がまだ残っていた。（中略）また外国映画によくあるように、正面玄関の上にはバルコニーがあった。」と回想している<sup>(4)</sup>。

このように、公主嶺の人たちは「ロス建て」について重ねて語り、単に「ロシアによって作られた建物」を指すだけでなく、「ロス建て」へのノスタルジーが感じられる。

### 3. 現在の公主嶺

現在の公主嶺にも「ロス建て」は残存している。それらは、公主嶺駅の北側の一区画に限定した範囲のみである。多くの「ロス建て」は、ほとんど手を加えられておらず、そのまま野ざらしの状態になっており、家屋に面している道路は舗装が剥がれたままであった。さらに、ある「ロス建て」の家屋では、ごみが山積みになっていた。



「ロス建て」が面する道路  
 撮影日：2018年8月22日  
 撮影者：大野絢也



「ロス建て」にある山積みのごみ  
 撮影日：2018年8月22日  
 撮影者：大野絢也

「ロス建て」の建物は、家屋のほかにも公主嶺駅の旧駅舎が残っている。戦前は公主嶺駅の表玄関は線路の北側であった。つまり、公主嶺駅の北側は日本人街であり、インタビューをした土屋さんの住居も北側であった。しかし、現在ではその駅舎も使用されている様子がなく、シャッターも下りていた。現在の公主嶺駅の駅舎は、鉄道線路の南側に向けて建てられている。そのため、南側の方が人

通りも多く、商店やビルも立ち並んでいる。現在の町の中心が南側に移っているという印象を受けた。



上：旧公主嶺駅駅舎（北側）  
 下：現在の公主嶺駅駅舎（南側）  
 撮影日：2018年8月22日  
 撮影者：佐藤量



公主嶺南側の大通り  
 撮影日：2018年8月22日  
 撮影者：大野絢也

ここで新たな疑問も湧き上がってきた。それは「ロス建て」はなぜ残存しているのだろうか、ということである。現時点で開発が進められているのが南側であるから、北側の「ロス建て」に手が付けられていないのか。それとも、あえてそこに手を入れていないのか。もしくは、手を入れられない理由があるのだろうか。このことは公主嶺という町が、満洲国の歴史をどう捉えているかということと重なる部分があるだろう。今後はこうした視点からも調査を続けていく必要がある。

### おわりに

本調査では、「ロス建て」を中心に公主嶺の景観調査を行なった。公主嶺の「ロス建て」はほとんど手を加えられておらず、放置されているような状態になっていることがわかった。

ロシア時代の建物をめぐっては、例えば、大連、ハルビンの場合、それぞれ「ロシア風情街」、「中央大街」と、観光資源

化されている。その一方で、公主嶺のように、保存されていないケースもある。後日、このような現状を土屋さんにお伝えしたところ、寂しがる一面を見せていた。

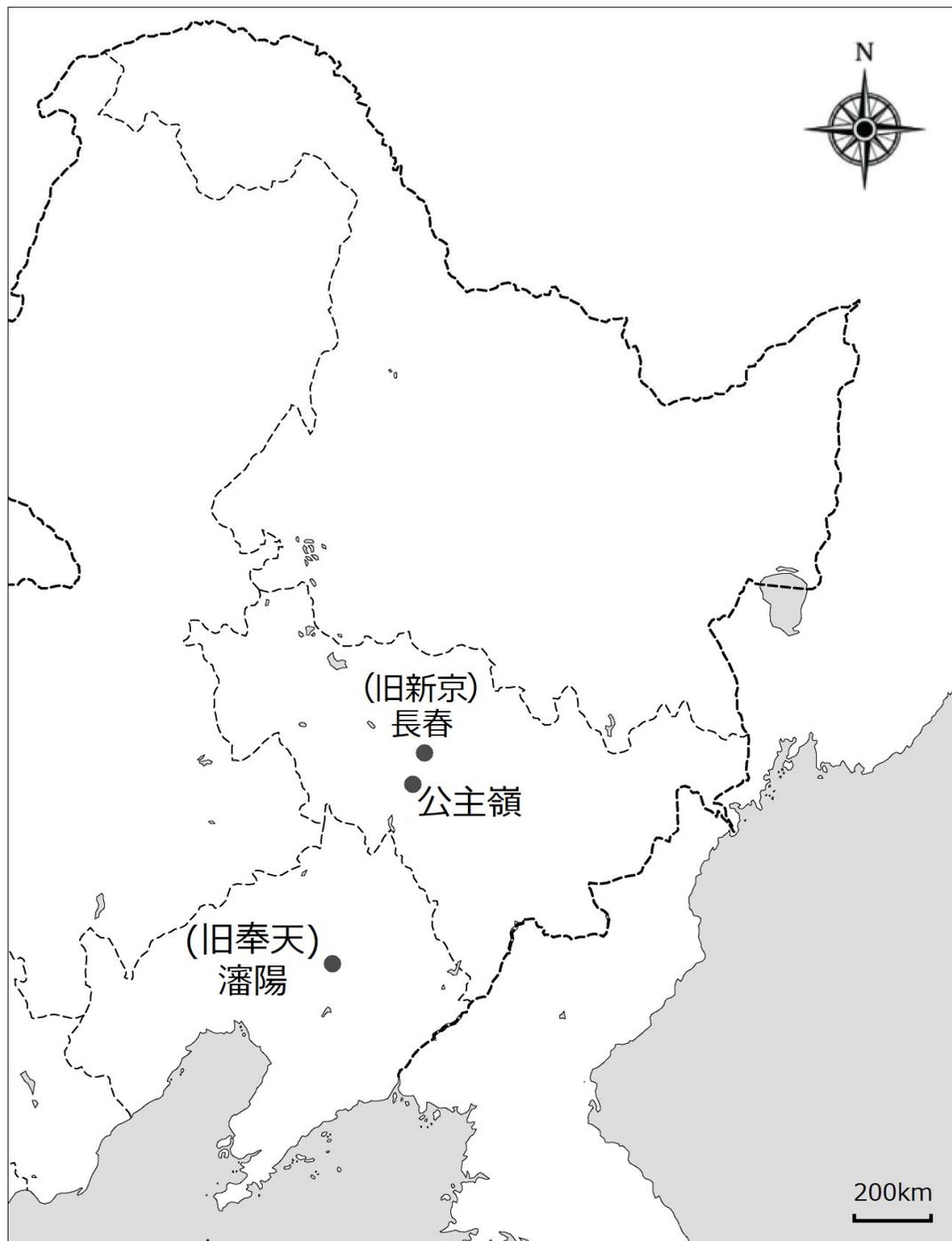
今後の公主嶺の行く末にも注目しつつ、他の地への調査も継続したい。

(1) 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会(1977)『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』龍溪書舎、pp. 235-236。公主嶺小学校同窓会(1987)『満洲公主嶺過ぎし40年の記録』公主嶺小学校同窓会、p. 14。

(2) 公主嶺小学校同窓会(1988)『満洲公主嶺—その過去と現在—』公主嶺小学校同窓会、pp. 32-35。

(3) 前掲『満洲公主嶺過ぎし40年の記録』p. 285。

(4) 前掲『満洲公主嶺過ぎし40年の記録』p. 63。



公主嶺の位置図 (作成者：大野絢也)